

[Original Paper]

Study on Paternal Child-Rearing Involvement and its Impact on Social Development of Preschoolers

Kazutaka Nabeshima*, Motomu Yamaguchi** and Tatsunobu Takeuchi**

* Chugoku Rousai Hospital

** Aino University, Faculty of nursing and rehabilitation, Department of Nursing

Abstract

Purpose and Method : More mothers are feeling anxious about child-rearing partly due to the lack of paternal support. The purpose of the present study is to identify the paternal engagement which will help to ease mothers' anxiety and stress and contribute to children's social development. The questionnaires in an envelope consisted of one to the mother, another to the father, and the other on the child's social development. The nursery staff directly requested the parents to fill them in.

Results and Discussion : Multiple regression analysis identified that father's "playing with the child" was related to perceived child's "social development" and "motor development". This suggests that paternal involvement in child-rearing is important for child's development. Five factors of maternal child-rearing : "joy of child-rearing", "paternal cooperation", "parenting stress", "child-rearing support", and "fellow mothers" were associated to all of the child's development factors : "social development", "friendship with peers", "cognitive development", "basic self-care ability", and "motor development".

Analyses of association between paternal and maternal factors showed that all of the paternal factors : "involvement in domestic affairs and child-rearing", "playing with child", "paternal roles", "psychological support", and "discipline" was associated with maternal perceived "paternal cooperation", and that father's "paternal roles" was associated with all of the maternal factors. Direct cares of the child like "playing with child" and "paternal roles" was related maternal "joy of child-rearing". Negative correlations were seen in paternal involvement in child-rearing and others' support such as "child-rearing support", and "fellow mothers".

Conclusions : 1. Paternal involvement in child-rearing of "playing with the child" was related to child's "social development" and "motor development".

2. Paternal involvement in child-rearing increases maternal joy of child-rearing and decreases needs of others' support.

Key Words : Paternal child-rearing involvement, Preschoolers, Social development

父親の育児参加と幼児期子どもの社会性の発達に関する研究

鍋 島 和 貴*, 山 口 求**, 武 内 龍 伸**

【要 旨】

研究目的・方法：現在の子育ては育児不安をもつ母親が増えている。その背景には父親のサポートの少なさが原因の1つとなっている。そこで、父親の育児参加は、母親の育児不安の軽減となるか、また、父親の育児参加によるかわりは、子どもの社会性の発達と関連があるかを検討することを目的とする。研究方法は、父親・母親の調査票と子どもの発達の調査票を封筒に入れて、保育園の保育士から直接調査を依頼する方法とした。

結果および考察：重回帰分析の結果、父親の【子どもとの遊び】は、子どもの【社会性の発達】と【運動の発達】に関係を示し、父親のかかわりが重要であることが示唆された。一方、母親の5因子【育児の感動】【身辺自立】【父親役割】【育児ストレス】【ママ友】と子どもとの発達の関係では、子どもの【社会性の発達】【仲間関係】【認知の発達】【身辺自立】【運動の発達】全てに関係を示した。

父親と母親の関係では、【家事・育児参加】【子どもとの遊び】【父親役割】【精神的サポート】【しつけ】という父親の全ての因子は、母親の捉えている【父親の協力】と関係があった。また、父の捉える【父親役割】は、母親の全ての因子と関係があった。【子どもとの遊び】【父親役割】といった直接的な子どもへの関わりは、母親の【育児の感動】と正の関係があり、父親の育児への関わりと母親の【育児支援】【ママ友】といった他者のサポートには負の関係が見られた。

結論：1. 子どもと遊ぶという父親の育児参加は、子どもの社会性の発達と運動の発達に関係を示した。

2. 父親の育児参加は、母親の育児の感動につながり、また、育児における他者のサポートの必要性を軽減する。

キーワード：父親の育児参加、幼児期、社会性の発達

I. は じ め に

現代の家族形態の変化は、近隣との関係性の希薄化などへも影響を及ぼしてきている。かつては拡大家族や地域社会のなかで、子どもたちの養育は父母であるのはもちろんの事、祖父母、さらにきょうだいなどに

よって育児が行われてきた。加えて、近隣の人々に「かわいがられる」、「叱られる」などの育児支援が存在していた。しかし、急激な核家族化や都市化の中で家族形態は多様化し、家族機能の変化や家庭教育力の低下する中で、育児の担い手は母親だけになっていることの問題を柏木は指摘している¹⁾。

* 中国労災病院

** 藍野大学医療保健学部看護学科

つまり、現在の育児は、もっぱら母親に移譲され、母親の育児不安が高まってきたと考える。その要因についても柏木によれば、まず、身近な夫の支援が得られない現状があげられる。また、母親の育てられてきた環境も影響する。さらに、牧野²⁾によればプライバシーを重視した家族形態は、近隣との関係を希薄化させ、サポート体制を得られない状況へと変化し、育児の相談者を持たない母親は社会的に孤立するといった育児不安への負の連鎖があげられる。

育児に疲弊する母親は、育児に参加しない夫への不満により夫婦関係も悪く、家族機能が弱体化する傾向にあることを示唆している。また、川崎ら³⁾の、育児初期の母親の育児意識・行動の縦断的調査によると、子どもの年齢の上昇に伴い、母親の育児不安が減少している。しかし、その一方で育児行動は、否定的行動が有意に増加している。母親の育児行動には、夫の育児参加の要因だけでなく、子どもの年齢も母親の育児に対する感情に影響を及ぼしている。母親が子どもの対応にもっとも苦慮する年齢と、母親が子どもに対して衝動的な感情を抱きやすいかを調査した野口・石井⁴⁾の研究結果によると、衝動的な感情を持つ母親の割合は0歳児72%、1歳児86%、2歳児92%、3歳児97%、4歳児は100%となっており(複数回答)、年齢の上昇に伴い増加している。つまり、0歳児が7割であったのが、4歳児は言語の発達や自我の発達に伴い母親への反抗的な行動をとる事が考えられるので、母親の衝動的な感情の結果「たたく」「怒鳴る」「しかりとばす」といった反応が全員に見られている。0歳児の生後4か月頃には、子どもが突然「嫌がる行動」など母親の「思い通り」にならないと、子どもに対する、衝動的な感情を抱くことが起こる。その割合から、母親のストレスの高さを感じ取ることができる。このことについて大日向⁵⁾も最近の母親は、子どもに愛情が持てず、育児にいらだつ母親が80%と高く、子どもに愛情が持てない母親の増加を危惧している。

また、服部・原田の大阪レポート⁶⁾では、育児行動に体罰を用いる母親は、育児不安が強く、精神的ストレスが高い状態にあり、子どもに体罰をする結果を招いていることを報告している。さらに、体罰が子どもの発達によく影響を与えると、育児行動の体罰への警鐘を示唆している。一方、父親の育児参加は、母親の精神的安定を図り、子どもの社会性との発達に関連があることを報告している。

母親の育児不安は、就業している母親より専業主婦の方が高いこと、また、夫婦の協力関係があり、近隣

との協力関係がある場合、育児不安が低いことを牧野ら⁷⁾が明らかにしている。しかし、大日向⁵⁾によれば、父親が育児を「母親の役割」と捉えている場合、母親の育児不安は高い傾向にあり、育児困難の具体的な例として「予測、期待が外れたことの苛立」「思い通りにならない」「子どもの自我に対する苛立」「自分の生活時間のないこと」「夫婦間の葛藤に苛立」「家族関係の苛立」「育児が評価されないことの苛立」「子どもが嫌い」「子どもが可愛く思えない」など、育児への忌避感や子どもへの苛立ちを示すタイプの母親が増えてきていることに危機感があることを示唆している。

母親の育児不安には、父親が関係しているが、育児参加以外の父親と母親との関係の重要性を示唆している。特に幼児期の父子関係の中で2,3歳児は、父親が愛着の対象となることが多いと繁多⁸⁾は指摘している。つまり、年齢が高くなるにつれて父子とのかかわりで遊びの多い子どもは、運動や社会性の発達が高くなることを報告している。

数井・無藤・園田⁹⁾は、子どもの発達について夫婦関係が母親のストレスに関連しているとし、父親の家族とのかかわり方が間接的に子どもの発達に影響しており、また、良好な夫婦関係が愛着を促進することを報告している。さらに、中島ら¹⁰⁾は、母親の視点から夫の父親行動について、子どもに対して苦手意識や戸惑いを抱いている父親の育児参加の現状があることを指摘している。

汐見¹¹⁾によると、父親の育児参加は、母親を育児のモデルとし、良好な夫婦関係の中で父親の育児行動が促されていると言う。育児不安の軽減には父親の育児参加の必要性を示唆すると同時に、子どもへのかかわりの高い父親が子どもの社会性を促す可能性を示唆しており、父親のかかわりが子どもの社会性の発達に関与すると考えられる。

II. 研究目的・意義

1. 研究目的

父親の育児参加は、母親の育児不安・ストレスの軽減となり、母親の精神的安定となるかを明らかにする。また、父親の育児参加による、子どもの社会性を発達させる父親のかかわりを明らかにする。

2. 研究の意義

現代の乳幼児を持つ親世代は、少子化時代に育ち子どもとのかかわり体験が少なく子どもを知らないため

に、思い通りにならない子どもの対応が分からない母親は、「社会的孤立」を招く子育ての社会的問題となっている。母親の育児不安をもたらす要因には、まず、身近な夫の支援が得られない現状が挙げられる。また、母親が母親になるまでに、育てられてきた乳幼児期の養育環境も影響する。さらに、近隣関係の希薄化により、サポート体制がなく、かつ子育ての相談者を持たない母親は、社会的に孤立するといった育児不安への悪循環を加藤ら¹²⁾は指摘している。

育児不安の強い母親の育児には、父親が参加することで母親の精神的安定をもたらし、子どもの発達に良いことを服部、原田⁵⁾らは報告している。また、東・柏木・Hess¹³⁾の研究結果においても、父親が子育てに参加することで子どもの認知発達がわが国より、アメリカの方が有意に高い結果を報告している。このことからわが国の子育てには、母親の「育児不安」「育児ストレス」が増加する傾向も考慮し、積極的に父親の育児参加が必要である。父親の「子どもと一緒に外で遊ぶ」「子どもを叱ったり、ほめたりする」「幼稚園・保育園の行事に参加する」などの育児参加は、子どもの発達と関係があることが報告されている。幼児期の社会性の発達には、父親の育児参加は重要な意味がある。

現在の少年犯罪や不登校、いじめなどは子どもの社会性の発達に大きく関与しており、特に母子関係だけでなく、父子関係の規範意識や、父親の育児参加に意義があると考えられる。しかしながら、父親の育児参加度についてベネッセの調査¹⁴⁾によれば、諸外国に比し、我が国は最低水準である。さらに、父親に関する研究は増加傾向にあるが、父親の育児参加と子どもの発達の研究はあまり見当たらない。したがって、育児不安の強い母親は、子育てに参加しない夫への不満や、「父親不在」と言われるように父親役割・機能をはたすことができただけでなく、責任を回避する夫との夫婦関係は悪くなり家族機能が弱体化の傾向にあることが報告されている^{15,16)}。

母親の育児不安をもたらす要因には、身近な夫の支援が得られない現状が挙げられる。また、母親の育てられてきた環境も影響することに加え、近隣関係の希薄化により、サポート体制のない子育ての相談者を持たない母親は社会的に孤立するといった育児不安への負の連鎖があげられる。子育てに疲弊する母親は、子育てに参加しない夫への不満から、夫婦関係も悪く家族機能が弱体化する傾向にあり、子どもの社会性の発達には、母親への育児負担の軽減となる父親の育児参

加は重要である^{7,11)}。

Ⅲ. 研究 方 法

1. 研究デザイン

自記式質問紙調査による調査研究である。質問紙を用いて父親の育児参加と母親の育児不安（養育態度）を調査、また父親から見た子どもの発達、母親から見た子どもの発達を調査し、データ収集を行った。

2. 調査対象者

対象者はH県内の幼稚園もしくは保育園に所属している4～6歳の幼児の親（父親及び母親）の420組840名に調査を依頼。この年齢児に焦点をあてた理由として、①社会性の発達に重要な時期であること。②園における遊びを通してコミュニケーションが発達し関係性を育成することにつながる。③幼児期の社会性の発達に父親の育児参加との関係性を示唆する柏木・若松¹⁷⁾の研究から決定した。

調査票配布数420配布（840名）。回収数200組（400名）。回収率は47.6%であった。

3. 研究の場所：H県内の2か所の幼稚園及び6か所の保育園

4. 質問紙の構成

- 1) 基本的属性：父親の年齢、母親の年齢、対象（父親・母親）となった子どもの年齢、きょうだいの数
- 2) 質問紙の構成：
 - ① 父親の育児参加は、ベネッセ¹⁴⁾の幼児アンケート20項目、中野¹⁸⁾の3歳児の発達と父子関係の研究から20項目を参考にして、計40項目を作成した。
 - ② 母親の育児不安については牧野、中野、柏木⁷⁾の育児不安の調査表から20項目を参考に作成した。夫婦関係に関する調査票は牧野、中野、柏木⁷⁾、法橋¹⁹⁾の調査票を参考に20項目作成した。
 - ③ 子どもの認知・社会性の発達は、山口²¹⁾、Yamaguchi²²⁾の研究で、 α 係数0.71～0.88と信頼性の得られた項目から30項目を作成した。調査票は、1「あてはまる」～5「あてはまらない」の5件法とした。

5. 調査期間と調査手続き

- 1) 調査期間は2010年11月～2010年12月末日
- 2) 調査手続きは、施設長に4～6歳児をもつ親を対象、研究目的および人権擁護の説明を行い協力の得られた施設で調査した。父親・母親の調査票と子どもの発達の調査票を封筒に入れ、担当保育士および担当教諭を通し調査票を渡してもらい、記入し、封筒に封をして郵送してもらう方法とした。

6. データの分析方法

- 1) 父親、母親、子どもの発達の分析には、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を用い、因子負荷量0.3以下項目は分析から除外することとした。父親の育児参加の項目は1項目、母親の育児不安の項目は1項目、父親から見た子どもの発達は2項目が削除された。累積寄与率は40%以上とし、項目間 α 係数は0.7以上を整合性有りとした。
- 2) 子どもの発達について、父親と母親の因子別得点比較は t 検定で行った。
- 3) ①子どもの発達と母親の養育態度の関係、②子どもの発達と父親の育児参加行動との関係、③母親の養育態度と父親の育児参加行動との関係を明らかにするために強制投入法による重回帰分析を行った。統計ソフトにはSPSS Windows版17.0Jを用いた。

7. 倫理的配慮

H大学看護学部倫理委員会の承認を得た後、倫理的配慮を記載した書面を用いてH県内の幼稚園及び保育園の施設長に依頼し同意を得た。次に対象者の同意を調査票の回答を持って同意とすることを書面に記載し、調査票の回答によって同意が得られたとした。対象となる人権擁護として、対象者に匿名性であることと、調査結果を統計処理するために個人の特定化はできないために、プライバシーが保持されることを書面に記載した。調査への協力の承諾については、調査票の回答を持って承諾とした。また子どもについては、アドボカシーにより代諾者である親の同意とし、調査票は、統計処理を行うため、個人が特定できないようにすることも書面において記載した。

調査票の提出は、夫婦そろって封筒にいれ封筒に封をして回収した。対象となる人への危険性と不利益について、所得・学歴など本人に不利益となることを調査票の内容に含まないこととし、調査を途中で中止しても何ら不利益をこうむらないことも記載した。回収した調査票の管理としては、鍵がかかる場所に調査票を保管し、統計処理したデータが入力されたUSBメモリも同様に鍵のかかる場所に保管した。データ収集した調査票は研究終了後、シュレッダーにて破棄の説明をした。予測される学問的、社会的貢献として、子どもの発達と父親のかかわりがどのような影響があるかを明らかにし、父親の参加の意味と父親の育児支援の一助とする。

IV. 研究結果

1. 基本的属性

両親の年齢は、表1に示すように父親の平均年齢が36.7歳、母親の平均年齢が34.9歳である。対象者数は400名（回収率47.6%）であった。対象となった子どもの平均年齢は4.91歳で4歳が47人で全体の23.5%、5歳が120人で60%、6歳が33人で16.5%であった。きょうだいの数の平均は2.2人で、1人が全体の14%、2人が58%、3人以上が28%であった。対象となった子どもの性別は男117人、女83人であった。

2. 因子分析結果

因子分析は、父親の育児参加、母親の育児不安、子どもの認知・社会性の発達に関する父親からの回答と母親からの回答の4つについて、因子分析を行った。すべての因子分析は、主因子法を用い、バリマックス回転を行った。

1) 父親の育児参加

因子分析の結果、5因子が抽出された。累積寄与率は48.5%であった。第1因子（F1とする）は、「食事の後片付け」「家事を手伝う」「掃除をする」「食事のしたくをする」など10項目からなり、母親の育児に協力する内容から【家事・育児参加】とした。 α 係数は0.85と高い整合性が得られた。F2は「子どもと屋

表1 基本的属性

対象の平均年齢		子どもの年齢別 人数 (%) n=200			きょうだい数 人数 (%) n=200		
父親	母親	4歳	5歳	6歳	1人	2人	3人
36.7	34.9	47 (23.5)	120 (60)	33 (16.5)	28 (14)	116 (58)	56 (28)

内で遊ぶ」「子どもと外で遊ぶ」「休日に動物園・水族館・植物園などに連れて行く」などの9項目からなり、子どもとの遊びにかかわる内容であり【子どもとの遊び】とした。 α 係数は0.80であった。F3は、「子どもの将来について話をする」「子どもを通して地域と関わろうとする」「育児のことを妻に話かける」などの10項目からなり、父親としての役割に関する内容から【父親役割】とした。 α 係数は0.79と整合性が得られた。F4は、「子育ては妻がするものである」「子どもを育てることが負担である」「妻から要求があれば育児の相談にのる」などの7項目からなり、母親としての役割や妻への負担軽減などの妻への思いへの内容であり【精神的サポート】とした。 α 係数は0.76であった。F5は、「悪いことをしたら叱る」「子どもが悪い時は謝るように働きかける」「子どもの様子を聞く」の3項目からなり、いずれも教育的視点が含まれていることから【しつけ】とした。 α 係数は0.79であった。

2) 母親の育児不安(養育態度)

因子分析結果は、5因子が抽出された。削除項目は3項目であった。F1は、「子どもの成長・発達に感動する」「子どもから学ぶことが多い」「子どもの笑顔や寝顔に癒される」「子どもがかわいくてたまらない」などの11項目からなり母親が育児に対する思いの内容から【育児の感動】とした。 α 係数は0.86と高い整合性が得られた。F2は、「夫は口だけで手伝ってくれない」「子どものことを父親に相談する」「父親は子どもと関わらない」などの10項目からなり、父親や夫の育児に対する行動や思いから【夫婦関係】とした。 α 係数は0.88と高い整合性が得られた。F3は、「子どもが煩わしく八つ当たりをする」「言うことを聞かない時は怒鳴ることがある」「わずらわしくイライラする」などの10項目からなり、育児に対する不安やネガティブな思いの内容から【育児ストレス】とした。 α 係数は0.82と高い整合性が得られた。F4は、「自分の自由な時間が取れない」「生活のリズムが乱れて疲れる」「夫以外にサポートしてくれる人が少ない」などの5項目からなり、育児に対する夫以外の支援という思いから【育児支援】とした。 α 係数は0.62であった。F5は、「ママ友との関係作りが大変である」「ママ友と話す事で気持ちが楽になる」の2項目からなり、ママ友との関係から【ママ友】とした。 α 係数は0.50であった。

3) 父親から見た子どもの発達

4項目を削除し、5因子が抽出された。F1は、「親

にありがとう、ごめんが言える」「母に叱られ悪いと認める」「父に叱られ悪いと認める」「家族に挨拶をする」などの17項目からなり、父と子の関係や母との関係から【社会性の発達】とした。 α 係数は0.94と高い整合性が得られた。F2は、「友達を遊びの仲間に入れられる」「友達をかばったりする」などの7項目からなり、友との関係やルール作りという点から【仲間関係】とした。 α 係数は0.79と高い整合性が得られた。F3は、「簡単な折り紙を折る」「簡単なしりとりが出来る」「テレビなどのストーリーを話す」などの6項目からなり、ものごとを認識して行動に移す内容から【認知の発達】とした。 α 係数は0.79と高い整合性が得られた。F4は、「ひとりで靴を履く」「自箸を使ってご飯が食べられる」などの5項目からなり、自分のことができる基本的な生活自立から【身辺自立の発達】とした。 α 係数は0.82であった。F5は、「ひらがなで自分の名前を書く」「ひらがなをほとんど読む」「うんち後のお尻をふける」の3項目からなり、 α 係数は認知・運動面の発達と考え【運動の発達】とした。 α 係数は0.71であった。

4) 母親から見た子どもの発達

5因子が抽出された。第1因子は、「片足でケンケンできる」「ジャンプができる」「線にそってハサミで紙を切る」などの12項目からなり運動・認知発達を含めた項目となることより【運動の発達】と命名した。 α 係数は0.85と高い整合性が得られた。第2因子は「父に叱られ悪いと認める」「母の指示に従うことが出来る」「父の指示に従うことが出来る」などの9項目からなり、父と子の関係や母と子の関係の項目からなっていることから【社会性の発達】と命名した。 α 係数は0.89と高い整合性が得られた。第3因子は、「友達を遊びの仲間に入れられる」「友達をかばったりする」「友達にあいさつ出来る」などの8項目からなり、友との関係やルール作りという点から【仲間関係】と命名した。 α 係数は0.76と高い整合性が得られた。第4因子は、「ひらがなで自分の名前を書く」「ひらがなをほとんど読む」「簡単なしりとりが出来る」という6項目からなり、【認知の発達】と命名した。 α 係数は0.76と高い整合性が得られた。第5因子は、「顔や手を洗って拭く」「洋服が着替えられる」という5項目からなり、自分の身の回りの自立ということから【身辺自立の発達】と命名した。 α 係数は0.59であった。

5) 子どもの因子別得点比較の結果

父親・母親からの子どもの発達の因子構造で比較し

た結果(表2), F1【社会性の発達】では, 父親からの子どもの発達が4.53で, 母親は4.68と有意に母親が高かった($p<.001$)。F2の【仲間関係】では, 父親が4.32で, 母親が4.60と有意に母親が高かった。F3の【認知の発達】では, 父親が4.59で, 母親が4.45と有意($p<.001$)に父親が高い結果であった。F4の【身辺自立の発達】では, 父親が4.74で, 母親が4.80と有意な差は認められなかったが, 母親に高い傾向を示した。F3の【認知の発達】では, 父親が4.59で, 母親が4.45と有意($p<.001$)に父親が高い結果であった。F5の【運動の発達】では, 父親が4.13で, 母親が4.90と有意に母親が高かった($p<.001$)。

3. 重回帰分析結果

1) 父親と子どもの発達の重回帰分析結果(表3)

父親のかかわりが子どもの発達にどのように関係しているかをみるために, 父親の育児参加によるかかわ

りを従属変数とし, 子どもの発達を独立変数とした重回帰分析の主結果は, 【子どもとの遊び】と【しつけ】に認められた。F1【家事・育児参加】の主効果は認められなかったが, 偏回帰係数では, 【子どもの運動】と関係を示した($p<.05$)。F2の【子どもとの遊び】では, 有意確率($p<.001$)で効果が得られた。標準偏回帰係数では, 父親の【子どもとの遊び】と子どもの【社会性の発達】においても関係を示した($p<.05$)。また, 父親の【子どもとの遊び】は, 子どもの【社会性の発達】【運動の発達】とに関係を示した($p<.05$)。F3【父親役割】の重回帰分析結果は, 関係性の傾向は示されなかった。F4の父親の【精神的サポート】も, 子どもの発達との関係性の傾向は示されなかった。F5父親の【しつけ】は, 子どもの【仲間関係】の主効果が認められた($p=.013$)。

2) 母親と子どもの発達の重回帰分析結果(表4)

母親と子どもの発達との関係を見るために, 母親の

表2 子どもの発達の因子別得点比較

	父親 平均値 (SD)	母親 平均値 (SD)	t 値	有意確率
社会性の発達	4.53 (0.92)	4.68 (0.62)	6.19	.001
仲間関係	4.32 (1.06)	4.60 (0.73)	8.76	.001
認知の発達	4.59 (0.90)	4.45 (1.05)	-3.82	.001
身辺自立の発達	4.74 (0.77)	4.80 (0.57)	1.91	.056
運動の発達	4.13 (1.38)	4.90 (0.42)	13.13	.001

表3 父親と子どもの発達の重回帰分析(数値:標準偏回帰係数)

父親(目的) 子ども(説明)	F1 家事・ 育児参加	F2 子ど もの遊 び	F3 父親 役割	F4 精神 的サ ポート	F5 しつ け
F1 社会性の発達		.105*			
F2 仲間関係					.092*
F3 認知の発達					
F4 身辺自立の発達					
F5 運動の発達	.092*	.087*			
F 値	F=2.088	F=4.526	F=.887	F=1.069	F=2.899
有意確率	.065 [†]	.0001*	.490	.377	.013*

[†] $p<.10$ * $p<.05$ *** $p<.001$

表4 母親と子どもの発達の重回帰分析(数値:標準偏回帰係数)

母親(目的) 子ども(説明)	F1 育児 の感 動	F2 夫婦 関係	F3 育児 スト レス	F4 育児 支 援	F5 ママ 友
F1 社会性の発達	.109**	.105*	-.121**		
F2 仲間関係	.137***				
F3 認知の発達			.107**		
F4 身辺自立の発達	.239***	.207***	.145***	.093*	.118*
F5 運動の発達	.126***		-.076*		
F 値	F=30.647	F=7.707	F=7.613	F=2.578	F=3.998
有意確率	.0001	.0001	.0001	.025	.002

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

育児不安（養育態度）を従属変数として、子どもの発達を独立変数として、重回帰分析の結果は、F1の母親の【育児の感動】は、有意確率 $p<.001$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、子どもの【社会性の発達】【仲間関係】【身辺自立の発達】【運動の発達】に関係を示した（ $p<.001$ ）。子どものF2である母親の【夫婦関係】重回帰分析結果は、有意確率 $p<.001$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、母親の【夫婦関係】と子どもの発達の【身辺自立の発達】に関係を示した（ $p<.05$ ）。子どもの【社会性の発達】においても関係を示した（ $p<.01\sim.001$ ）。F2【父親の協力】は、子どもの【社会性の発達】【身辺自立の発達】に関係を示した。F3【育児ストレス】の重回帰分析結果は、有意確率 $p<.001$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、子どもの【社会性の発達】【身辺自立】に負の関係を示した（ $p<.01$ ）。子どもの【認知の発達】【運動の発達】においては正の関係を示した（ $p<.01\sim.001$ ）。F4【育児支援】の重回帰分析結果は、有意確率 $p<.025$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、母親の【育児支援】と子どもの【身辺自立の発達】とに関係を示した（ $p<.05$ ）。F5母親の【ママ友】の重回帰分析結果は、有意確率 $p<.002$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、子どもの【身辺自立の発達】に関係を示した（ $p<.05$ ）。

3) 父親と母親の重回帰分析結果(表5)

父親の育児参加は、母親の育児不安や、母親の精神的負担を軽減すると仮定して、因子分析から得られた構造を重回帰分析により、それぞれがどのように関係を及ぼしているかを分析することを目的として、父親のF1【家事・育児参加】、F2【子どもとの遊び】、F3【父親役割】、F4【精神的サポート】、F5【しつけ】を従属変数とし、母親のF1【育児の感動】、F2【父親の協力】、F3【育児ストレス】、F4【育児支援】、F5【ママ友】を独立変数として重回帰分析を行った。

父親のF1【家事・育児参加】は、有意確率 $p<.001$

と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、父親のF1【家事・育児参加】は、母親のF3【父親役割】に関係を示した（ $p<.001$ ）。また、F4【育児支援】においては負の関係を示した（ $p<.01$ ）。父親のF2【子どもとの遊び】の重回帰分析結果は、有意確率 $p<.001$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、母親のF1【育児の感動】に関係を示し（ $p<.05$ ）、F2【子どもとの遊び】においても関係を示した（ $p<.001$ ）。また、父親のF2【子どもとの遊び】は、母親のF1【育児の感動】F2【夫婦関係】に関係を示し（ $p<.05\sim.001$ ）F5【ママ友】には負の関係を示した（ $p<.01$ ）。父親のF3【父親役割】の重回帰分析結果は、有意確率 $p<.001$ と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、全ての因子に関係を示した（ $p<.05\sim.001$ ）。【育児支援】【ママ友】には負の関係を示した。父親のF4【精神的サポート】の重回帰分析結果は、有意確率（ $p<.0001$ ）と主効果が得られた。標準偏回帰係数では、母親のF2【夫婦関係】に関係を示した（ $p<.001$ ）。F5父親の【しつけ】の重回帰分析結果は、有意確率（ $p<.054$ ）と10%水準で主効果が得られなかった。標準偏回帰係数では、母親のF2【夫婦関係】とF3【育児ストレス】に有意な関係を示した（ $p<.05$ ）。

V. 考 察

1. 基本的属性の考察

父親・母親の年齢は30代を占めており、少子化世代に育った親世代であると考えられる。つまり、子どもとの接触体験が少なく、わが子がはじめてというのが50%である親世代である。したがって、子どもを知らないまま親になり、子育てをしている親たちの世代である^{6,11,21)}。

本研究では、幼稚園と保育園の割合から見ると保育園の割合が多く、子どもを知らない世代の母親であることには変わりないが、就労していることを考えると、

表5 父親の育児参加と母親の育児不安の重回帰分析(数値：標準偏回帰係数)

母親(説明)	父親(目的) 家事・育児参加	子どもとの遊び	父親役割	精神的サポート	しつけ
育児の感動		.107*	.134**		
夫婦関係	.263***	.331***	.133**	.229***	.119*
育児ストレス			.099*		.092*
育児支援	-.139**		-.115*		
ママ友		-.158**	-.181**		
F値	F=6.770	F=11.835	F=8.355	F=6.253	F=2.197
有意確率	.0001	.0001	.0001	.0001	.054 [†]

[†] $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

職場の先輩などから育児体験の情報や相談をすることが考えられる²²⁾。住田によると社会的な関係がもてる機会の多い母親の方が「育児不安」が少なく、母親の「社会的孤立」が少ないことを報告している²³⁾。

子どもの同胞では、2人が6割近く占めていることから、子どもの自身の発達にも好影響を与え、子育てに対して不安は比較的少ないと考えられる。しかし、野口・石井は、母親が子どもに衝動的感情をもつ割合が高くなることを指摘しており⁴⁾、就労による時間のなさが母親のストレスや育児不安につながることも考えておく必要がある。

2. 因子分析の考察

1) 子どもの発達の因子分析の考察

父親から見た子どもの発達のF1【社会性の発達】であり、母親では【育児の感動】がF1で、F2【社会性の発達】となっている。その因子構造の順番について考えられることは、乳児期から子どもの世話をしなければならなかった子どもの発達を振り返り、母親自身の子育ての評価として受け止められる。それは、まさに母親の育児への感動となっているのであろう。したがって、幼児期後期になると、むしろ、母親は身近で世話はするものの、子どもとの距離は乳児期ほどの愛着は見られないと考える。山口³⁰⁾の研究で示唆するように、幼児期の母親の養育態度は、乳児期のパターンの傾向をもつこともその表れであろうと推察できる。

母親から見た子どもの発達のF1は【運動の発達】では、「ケンケンができる」「ジャンプができる」「ハサミで紙を切る」「ブロックや積み木で形作る」「箸をもってご飯を食べる」などの結果から、年齢相応の運動能力の発達ができるようになっており、できないことの多かった乳児が身辺自立だけでなく、微細な運動まで発達するようになったのは、母親のこれまでの苦労が報われることであり、改めて発達した子どもに感動できるのであろう。F2の【社会性の発達】では、「悪いことをしたら叱られる」「指示に従える」「ごめん」「ありがとう」「親への挨拶」といった社会性を含む内容であり、母親の日々の生活を通して学んでいることが分かる。何気なく行っている生活様式そのものが養育態度であるになっていると言えよう。また、【仲間関係】は、母親ではF3に抽出されており、社会性を含む内容であり、父親よりも母親の方が、「友達に挨拶ができる」「自分より小さい子の面倒をみる」など子どもの身近な行動をよく観察しているのが分かる。父親と共通しているのが「友達をかばう」「ルー

ルをつくって遊ぶ」という関係性の発達である。子どもの年齢は5歳が6割近くを占めており、この時期は精神的にも身体的にも葛藤体験が社会性の発達に重要である。

【認知】の発達では、父親が第3、母親では第4因子に抽出されている。しかし、内容においては、母親から見た発達の方が「ひらがなをよむ」「自分の名前を書く」「数字を数える」と、父親より整合性が良い。これも、子どもと母親の身近な関係から発達をよく捉えられていると考えられる。父親の内容には、母親と共通した「折り紙が折れる」があるが、「テレビのストーリーを話す」「見聞きしたことを話す」といったものであり、父親と子どもとの間には、接する時間も関係すると考えるが会話の乏しさが窺われる。父親は、子どもとの遊びを通して、コミュニケーションを図ると同時に子どもの発達に関心を持つ必要性を示唆するものである。

2) 因子別得点比較の考察

同じ子どもの発達の質問紙による調査結果の因子分析は、父親の見かたと母親の見かたに差異があることが分かった。先述した因子分析の考察では、母親が子どもを身近でよく観察しているだけでなく、かかわっているから子どもの発達を見られていると考えられる。因子構造は、異なるが因子別得点比較をして見ると、因子構造の項目内容の整合性からも明らかのように、【社会性の発達】【仲間関係】【運動の発達】の3領域で母親が有意に高い結果を示している ($P < .001$)。この結果は、母親の方が子どもとのかかわりが多いことから、子どもをよく見ている結果と考えられる。また、母親は子どもの発達に関心を示していると言えよう。さらに、母親の影響を受けやすいとも考えられる。子どもがどのように発達するかは、母親にかかっているといっても過言ではないと言える。

【認知】領域の発達においては、父親が有意に高い結果を示しており、内容は母親と異なり一様に比較できるかは疑問が残る。しかし、東、柏木、Hess¹³⁾の研究において、父親の不在・在よりも教育によるかわりか、子どもの認知発達に効果的であることから、さらに詳細に検討する必要がある。

3) 父親の因子分析の考察

父親の因子構造の順番から、【家事・育児参加】がF1に抽出されたことから、父親の育児参加の高さが窺える。F2は【子どもとの遊び】に次いで【父親役割】があげられており、父親が父親としての役割意識を高める上で、重要な示唆となる。また、子どもの

外遊びにおいて、以前の子どものように、徒党を組んで、冒険を含む闊達な遊びに徹することが不可能になり、自由奔放で「元気な子ども時代」を失ってしまい、遊び喪失の時代とも言われている²⁴⁾。汐見によれば現代の父親は、父親モデルのない時代に育ち、父親の役割について認識できずにいる父親役割葛藤のあることを指摘している²⁵⁾。また、本研究の結果は、「子どもとの遊び」や「父親役割」という、子どもの運動能力の発達や社会性を育む時期に重要な子育て支援と言えるだろう。幼児期の社会性や運動の発達を促進するためにも父親役割が重要である。この時期の幼児期の盛んな身体活動は、知的発達を導く、探索・模倣・記憶・思考しようとする欲求や、自己向上を目指す欲求という幼児の最も重要な発達の時期に、父親の育児参加によるかわりは子どもの社会性や運動の発達に関連を示している。したがって、父親の育児参加による子どもへのかかわりが社会性や運動の発達を促しているということを示唆するものである。

現在の母子関係の問題として亀口は、少子核家族化における母子密着などが子どもの自由や自立を損ねているという影響がある。母子密着への父親の介入は重要であることを指摘している²⁶⁾。この点からも父親の育児参加が必要であると言える。また、父親はわが子を自立させる責務を有しているが、そう考えるとわが子に自分の生きざまや、働きざまを具体的に見せておくことが、子ども自身の自立のための葛藤をより正當に体験させることにつながると言えよう。さらに、父親役割には、自立を促す役割を担う必要があるが、核家族が一般化している今日と言う時代にあって、子どもの人間的な自立を促すことが重要である。子どもをとりまく環境として、母子関係だけでなく、父子関係を考える方向性を見出せたと考える。

F4の【精神的サポート】は、いまだ、根強い「育児は妻がするもの」「子どもを育てるのが負担」の内容には、男性の「男は仕事、女は育児」といった考え方が根底にある。このような父親の考え方は、母親の育児不安・ストレスを高めるマイナス要因が含まれており、母親の育児ストレスを増加させている現状がある⁶⁾。【子どもとの遊び】や【父親役割】は、ひいては、父親が母親への【精神的サポート】につながることになると推察する。

4) 母親の因子分析の考察

母親の因子構造の順番から【育児の感動】が1番にあげられているのは、子どもの年齢が4, 5, 6歳という基本的な生活習慣が獲得できる時期であるために「で

きる」という発達は母親の育児のことの感動であろう。ここに至るまでの育児の大変さは、母親にしか分からないことも多く、乳児期から1歳, 2歳と子どもの動きに応じて、母親の精神的・身体的疲労も重なり、子どもの成長・発達をゆっくりと見直す機会もないことが多い。

本研究は、質問紙による子どもの発達を尋ねたものであり、あらためて子どもの育ちと子育てを振り返りとなっている。子どもの全てのことを行っていた母親は、さまざまなことが自分で出来るわが子の成長、発達に感動していることが窺える。また、日常的に接する母親にとって子どもの成長発達は、母親の育児の1つの評価となると考えられる。

次に、【子どもとの遊び】が2番目にあげられている。この時期は、男の子の遊びが身体的、動的であり男性である父親との方がダイナミックな遊びが可能であり、父親のこどもへの遊びのかかわりは子どもの発達を促進すると考える。また、東・柏木・Hess¹²⁾らの研究では、父親の存在だけでもこの時期の子どもの認知の発達にも影響をもたらすことが報告されているように、父親の【しつけ】が教育的要素を含むことから、父親が子どもの行動の良くないことなどを注意するというかかわりは認知発達へも影響を及ぼすと言えよう。さらに、服部・原田の⁶⁾大阪レポートにおいても同様に、父親の協力が母親の精神的な安定につながることから、重要な精神的サポートとならなくてはならないことがわかる。

F3の【育児ストレス】は、母親の育児ストレスに身近な夫のサポートは不可欠である。乳児期の子どもであれば、授乳による不眠など母親の生活リズムの変化は疲労に繋がり、育児ストレスが強くなる。しかし、父親の精神的サポートにより、母親の育児不安は軽減することを牧野²⁾、大日向⁵⁾、服部・原田⁶⁾、住田²³⁾は示唆している。父親のサポートの必要性は、乳児期だけでなく、自我の発達や反抗期の強い幼児期に於いても父親のサポートが重要となってくる。

本研究では、幼児期をもつ親を対象であるため、育児ストレスは、因子分析構造からみても高い順位ではなく、子どもの発達を身近に見ることのできる母親だから【育児の感動】がF1に抽出されているが、父親の【家事・育児参加】との関係は見られず、父親の【子どもとの遊び】や【父親役割】に関係を示しており、その背景には、身近な父親の存在があり、父親が役割をはたしていると、母親が認識しているからであろうと推察される。言い換えれば、もっとも身近な精

神的なサポートとしての役割も含まれるのであろう。内容の「言うことを聞かないと怒鳴る」「イライラする」「ダメという言葉が多い」「子どもの考えていることが分からない」などの否定的育児行動がある。幼児期の子どもは、言語も発達しており、母親への反抗的な言動も多い時期でもある。したがって、「叱る」行動が多くなれば、育児ストレスは高まるであろう。しかし【育児の感動】という客観的に子どもを見ることのできる母親であると評価できる。この時期の子育てには母親にはできない父親の存在を必要としていることが窺える。父親の役割と同時に母親にとっては、自分の子育てに自信が持たなくなることもあり、父親が母親を精神的にサポートする必要性があると言えよう。

F4の内容は、母親が「自分の時間がない」「生活のリズムが乱れる」「仕事との両立は難しい」といったものであり、父親の【家事・育児参加】の必要性となることを示すものと考えられる。母親の言うことを聞かない幼児期後期の子どもの反抗的な行動は、就労している母親の多重役割がもたらす疲労から考えても、野口・石井⁴⁾が報告しているように衝動的行動や否定的な感情に陥りやすい心理的状況も秘めており、子どもへの発達の悪影響となることを見逃してはならないと考える。そのためには夫の育児参加に加え、社会的資源の支援も必要となってくる^{27,28)}。

3. 重回帰分析の考察

1) 父親から見た子どもの発達の重回帰分析結果の考察

父親の育児参加としての【子どもとの遊び】は、子どもの【社会性の発達】に関係を示しており、子どものかかわりが、子どもの社会性・運動の発達に関係すると言えよう。父親の遊びは、ダイナミックであると同時に、行動力に富むものであり、時にはルールに反することへの指摘は、しつけそのものであり、遊びながら社会性を育むという重要な役割を担っていると考えられる。子どもの発達の促進において重要な役割を果たすことを示唆するものである。

2) 母親と子どもの発達の重回帰分析結果の考察

母親の【育児の感動】は、子どもの【仲間関係】【身辺自立】【運動の発達】のすべてに関係を示しており、【認知の発達】のみ関係は認められなかったが、母親の影響の強さを示すものである。山口³⁰⁾は、乳児期の養育態度が幼児期にまで影響を及ぼすことを報告しており、子どもの身の周りのことは、母親の世話から始まり獲得していく。そのプロセスで母親は、でき

ないことができる子どもの発達したことを喜ぶと同時に、母親の育児評価である【育児の感動】という結果が得られたと言えよう。母親の養育態度は、【仲間関係】と関係し、その仲間との関係は【運動の発達】に及んでいると推察される。

父親の育児参加が母親の育児ストレスの軽減となり、安定した養育態度となることを示唆するものである。また、子どもの発達を規定する要因には、母親の養育態度が挙げられており、特に乳児期のかかわりが、幼児期にまで影響するという山口¹⁹⁾の研究から、母親の安定したかかわりができるような、父親の育児参加が望まれる。

3) 父親と母親の重回帰分析の考察

父親の育児参加を目的変数とし、母親の育児不安を説明変数とした結果、母親の【育児の感動】は父親の育児参加の【子どもとの遊び】や【父親役割】に関係を示した。これは、母親自身が父親と遊んでいる子どもの姿を見て、子どもの成長発達を客観視出来る事が育児の感動へとつながっていると考えられる。山口ら²⁸⁾は母親自身が自らの育児を振り返り、今までやってきた育児を評価されることによって、次に育児に向かう肯定的感情が生まれると述べている。また、父親が子どもに関わろうとする姿勢や子育てに関心を持ち相談にのるという姿勢は、育児に対する母親の肯定的感情につながると考える。

次に、父親協力に関し、【家事・育児参加】【子どもとの遊び】【父親役割】【精神的サポート】【しつけ】に関し正の相関が得られた。今回の研究において家族形態（核家族であるのか複合家族であるか）を確認していないのであるが、核家族化が進んでいる現在、サポートを期待しているのは身近にいる父親であるという母親の思いが反映されているのではないであろうか。母親にとっても最も身近な存在は夫であり、夫の協力態度や母親自身を支えてくれるという意識は母親の育児に対する満足度を高めると考える。父親に第1次養育者としての支援も求めている側面、子どもたちと関わり遊んで欲しい、またしつけや妻自身のサポートもして欲しいということが窺える。育児不安の側面では、父親が子どもの将来を相談し、共に子どもたちの事を考え問題解決する事によって、育児に対して相談する関係は、住田²³⁾が述べている夫婦関係の良好さが育児不安の軽減につながることを考えると考える。

また、本研究では、父親の【精神的サポート】は母親の【育児ストレス】に負の関係を示し、父親の育児参加が母親の精神的安定となり、育児ストレスの軽減

につながることを示唆するものである。また、母親が他者の育児支援の必要性を少なくし、【ママ友】などとの社会的な広がりをもつことにつながることを意味するものである。さらに、母では、F2【父親の協力】は、父親のF1【家事・育児参加】F2【子どもとの遊び】F3【父親役割】F4【精神的サポート】F5【しつけ】のすべてに関係を示し、父親の支援は母親にとって重要な育児参加となることを示唆するものである。

山口は母親の養育態度²⁸⁾は、特に母親の肯定的感情が子どものパーソナリティとの関連があることを示唆している。また、三宅²⁹⁾や田島³¹⁾のアタッチメント研究から考えても、父親の育児参加は母親の安定につながり、母親の育児不安やストレスの軽減につながると推察される。

父親の育児参加と母親の育児不安との重回帰分析結果から示唆されたことは、【父親の育児参加】や【父親役割】を認識していることが根底になっていると考える。本研究は、家族機能が弱体化してきている今日の育児支援において、地域の支援の必要性は急務³²⁾であるが、母親の育児不安の軽減には、もっとも身近な夫である父親の育児参加を社会の育児支援システム³³⁾の中に構築していく必要性を示唆するものである。

VI. 結 論

1. 父親の育児参加では、【子どもとの遊び】というかわりが、子どもの【社会性の発達】【運動の発達】に関係を示し、父親が子どもと遊ぶことで、運動能力の向上と関係性や社会性の発達を促進するために、父親が子どもとの遊びというかわりの必要性を示唆するものである。
2. 父親の【しつけ】と言える子どものかかわりは、子どもの【仲間関係】に関係があることが示唆された。
3. 父親の【育児参加】は、母親の【育児の感動】や【育児ストレス】に関係を示し、父親の育児参加が母親の育児ストレスの軽減につながることが明らかにされた。
4. 父親育児参加では、父親役割が母親のすべての因子に関係を示し、父親の育児参加が母親の精神的サポートや子どもの発達に影響を及ぼしていることが明らかになった。

本研究結果は、父親の育児参加により、母親が父親から協力を得ていることを意識し、母親の育児参加の負の関係から、負担が軽減されることが推察される。

つまり、父親の育児参加は、重要な子育ての協力者となっていることを示唆するものである。

謝 辞

本研究の調査に快くご協力いただきました保育園、幼稚園、の施設長の皆様に感謝申し上げます。ならびに、貴重な時間を割いて質問紙に回答いただきました、保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 柏木恵子編著. 父親の発達心理学——父性の現在とその周辺. 東京：川島書店；1993.
- 2) 牧野カツコ, 中野由美子, 柏木恵子編. 子どもの発達と父親の役割. 京都：ミネルヴァ書房；1996. p. 50-8.
- 3) 川崎裕美, 海原康孝, 小坂忍, 出路愛, 片野隆司. 母親の育児不安と家族機能に対する感じ方との関連性の検討. 小児保健研究 2004；63(6)：667-73.
- 4) 野口恭子, 石井トク. 乳幼児をもつ母親の子どもに対する衝動的感情と反応. 小児保健研究 2000；59(1)：102-9.
- 5) 服部祥子, 原田正文. 乳幼児の心身発達と環境——大阪レポートと精神医学的視点. 名古屋：名古屋大学出版会；1991.
- 6) 大日向雅美. 育児不安とは何か——その定義と背景. 発達心理学の立場から. こころの科学 2002；103：10-5.
- 7) 牧野カツコ, 中野由美子, 柏木恵子. 子どもの発達と父親の役割. 京都：ミネルヴァ書房；1996.
- 8) 繁多進. 幼児期の父子関係——2・3歳児の父親へのアタッチメント. 白百合女子大学紀要 1987；23：93-110.
- 9) 数井みゆき, 無籐隆, 園田菜摘. 子どもの発達と母子関係・夫婦関係——幼児を持つ家族について. 発達心理学研究 1996；7(1)：31-40.
- 10) 中島久美子, 高橋恵, 國清恭子, 新井忍, 今関節子. 生後6ヵ月児をもつ母親が認めた夫の父親行動. 群馬保健学紀要 2006；26：19-26.
- 11) 汐見稔幸. 無免許運転の親を励ます. 発達 2000；21(84)：72-75.
- 12) 加藤邦子. 専業主婦家庭における父親のワークライフバランス——父親の子どもへのコミットメントが子どもの自発性に及ぼす影響. 家庭教育研究所紀要 2008；30：163-74.
- 13) 東洋, 柏木恵子, R. D. Hess 著. 母親の態度・行動と子どもの知的発達——日米比較研究. 東京：東京大学出版会；1981.
- 14) ベネッセ次世代育成研究所. 第1回 乳幼児の父親についての調査報告書. 東京：ベネッセ次世代育成研究所；2006.
- 15) 井原成男. 「父親不在」が家族にもたらしたもの. 家庭教育研究所紀要 1999；4(2)：89-94.
- 16) 庄司順一, 谷口和加子. 父親の不在と子どもの心の問題. 家庭教育研究所紀要 1999；4(2)：95-8.

- 17) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994 ; 5(1) : 72-83.
- 18) 中野由美子. 3歳児の発達と父子関係. 家庭教育研究所紀要 1992 ; 14 : 124-9.
- 19) 法橋尚宏. FFFS (Feetham 家族機能調査) 日本語版 I の開発とその有効性の検討. 家族看護研究 2000 ; 6(1) : 2-10.
- 20) 山口求. 幼児期の親子関係に関する研究——母親の養育態度の規定要因を探る. 児童研究 2004 ; 13 : 119-28.
- 21) Yamaguchi M, Ikeda K. The relationship between mental development of three-year-olds and maternal child-rearing attitudes. Early Childhood Education Research Association, Seventh Conference 2006 : 428.
- 22) エイデル・E・ゴットフライド, アレン・W・ゴットフライド編著, 佐々木保行監訳. 母親の就労と子どもの発達——縦断的研究. 東京：プレーン出版 ; 1996. p. 93.
- 23) 住田正樹. 母子の育児不安と夫婦関係. 子ども社会研究 1999 ; 5 : 3-20.
- 24) 村上京子, 飯野英親, 塚原正人, 辻野久美子. 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析. 小児保健研究 2005 ; 64(3) : 425-31.
- 25) 汐見稔幸. 父親と育児. 現代のエスプリ 1996 ; 342 : 157.
- 26) 亀口憲治. 夫婦関係の発達. In : 下山晴彦・丹野義彦編. 発達臨床心理学 (講座臨床心理学 ; 5). 東京 : 東京大学出版会 ; 2001. p. 255-74.
- 27) 井手紀子, 幸松美智子. 乳幼児を持つ父親の愛着傾向が夫婦関係および子育てに与える影響. 日本看護学会論文集 母性看護 2009 ; 39 : 105-7.
- 28) 山口求, 池田公子, 松高健治, 光盛友美. 幼児の発達と親の家族機能との関係に関する研究. 家族看護学研究 2006 ; 12(2) : 94.
- 29) 三宅和夫. 乳幼児の人格形成と母子関係. 東京 : 東京大学出版会 ; 1991. p. 57-67.
- 30) 山口求, 神谷ゆかり. 幼児をもつ母親の養育態度の縦断的研究. 安田女子大学大学院文学研究科紀要教育学専攻 2005 ; 10 : 49-62.
- 31) 田島信元. 社会的相互交渉と子どもの人格発達. 東京 : 多賀出版 ; 2000. p. 45, 46.
- 32) 長瀬由美. 母親の育児不安と父親との関連. 家庭教育研究所紀要 2006 ; 28 : 24-32.
- 33) 山口求. 地域とともに育つ「子育て・親育ち」支援——親子・地域社会の育ちのつながり. 広島国際大学看護学ジャーナル 2010 ; 8(1) : 95-105.